
Rising stars

RSライター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rising stars

【NZード】

N2782M

【作者名】

RSライター

【あらすじ】

串灘 遥（20歳）は仕事の依頼のためとある男を捜まんまと奴隸商人に捕まってしまう。しかし、そこをとうりすがり（？）の竜人に助けてもらつが…！？

始まりは劇的…！（前書き）

いつも、私の書く話にお付き合いくださこましてありがとうございます。

何分まだまだ新人ですので温かい目でみていただけるとありがたいかぎりです。

Rising stars第一作田楽しんでいただけぬ」とを祈ります。

できれば、感想や、評価いただけるとありがたいです。

始まりは劇的！！

あなたは知つてゐるだらうか…

「銀色の長い髪」、「青い瞳」の男を…
私は今その人物にいや、人ではない。彼は40年前の大戦で英雄と呼ばれた龍人なのだから
と、まあキメてみたんだけど

現在位置 たぶん船の上

状態 縛られて、目隠しされてる

二オイ おっさんの汗、誰かのゲロ

なぜこうなつたか その男を知つてゐるという男／案内してやると言
われ／まんまとだまされ／今にいたる

あたし バカ？… よし、いろいろ思い出してみよう

名前 串灘 遥

年齢 20歳

その男を搜してゐる理由 仕事を頼もうと思つてゐるから

身長 165cm

体重 思い出しあくない…

家族 もつと思ひ出しあくない…

友達 もうやだ…

思い出したらなんか疲れた…。はつ！最後の誤解まねいちゃう…ち
や、ちゃんと友達いるよーえーと…6人…！…胸を張つて言つてる
あたしつて…

（家族については…また今度、縄がほどけてゐる時にでも。）

まま、まま、まあそれはさておき（おいといでいいのかな？）
この状態どうしよう そんなときド「オオオオオン、と船が揺れた
待つて、音的に穴あいたよね。いや、まあ目隠しされてるからよ
くわかんないけど、ひとつ言い切れる
『速くどうにかしないと明日を迎へられない…』

始まりは劇的…！（後書き）

続きが出来次第乗せていこうと思っています。これからよろしくおねがいします。

三章の仕組み---(前書き)

2作目です。

目覚めとは絶叫！！

田覚めるとどうかの部屋のベッドの上だった。
ん？ よし、状況確認しよう。

部屋 木造の部屋、どう考へても病院じやない
部屋の隅 花が飾つてある、しなびてる
目の前 知らない40後半のおっさんが15歳ぐらいの少女を襲つ
てる
右隣 22、3歳の長い銀髪の男の人がドアから入つてきた
左隣 壁
あれ？もう一度確認してみよつ。

部屋の隅 花しなびてる
目の前 おっさんがはあ、はあ言って少女を襲おうとしている 少女恐怖のあまり言葉がでない
右隣 男の人、思考回路停止
左隣 壁

あたし、最大級の悲鳴

次の瞬間、目の前のおっさんが部屋の壁をぶつ壊して星になつてい
た…まあ、自業自得?

! ! ! ! ! ! ! !

「人の義妹になにしてんだ!!」この歩く性犯罪者が!!
と、銀髪のおじいさんは田の前で迷いになつたおっさんに向かつて叫んでいる。

てつ、さつきまでドアのところにいたじゃん！？

距離は約5mそれでも一瞬で移動できる！？と、ツツ「ハリビリ満載なのに一番今どうでもいいことを考へる私がいた。いや、まあどうでもよくはないけど…。そんな感じでいたら

「やや！起きたかい。」

と、銀髪の男の人が話しかけてくれたので、はいと答えた。

「さつきは叫んでくれてありがとう、助かったよ。それにしてもいい叫び声だったね。」

いや、叫び声ほめられても素直に喜べないんですけど…。

とりあえず愛想笑いをしようと起きよつとしたらわき腹に激痛が走つた。あまりの痛みにうう…とつめき声をあげてしまった。

「大丈夫…じゃなさそうだね」

痛みの元を確かめると 包帯が巻いてあり、血がにじんでいた。

「…」驚いたのは私でも、銀髪の男でも、襲われた少女でもなく襲つていたおっさんだった。

さつきはあまりに唐突すぎてちゃんと見てなかつたおっさんを見てみると、白衣を着ていた。…この人医者かなにかなんだろ？？といふかなんでこの人が私の傷を見て驚くの？その答えは次の二言でなんとなくわかった。

「おお、思つてたよりずつと傷の直りが早いな」どうやら私の傷は酷かつたらしい ん、酷すぎるぐらいだつたらしい。私はおっさんもとい歩く性犯罪者から今までのことを教えてもらつた。

「要するに、用兵部隊Rising starsは依頼である奴隸商人を捕まえ、人々を解放するも私は重症でやら追えず拠点に連れてきたと…」納得しきれなかつたが、今の状況からすれば納得せざるおえなつかった。

話に一段落ついたところで銀髪の男が

「そういう、まだ名乗つてなつたな。俺はリューク、リューク・ドラグニティード。よろしく。」

と言つて握手を求めてきたので、握手をした。

その後彼 リュークは襲われていた少女と歩く性犯罪者の名前を教えてくれた。少女は、白炎 はくえん 愛理 あいり おっさんは…村良 むらら 清太郎 せいたろう 平仮名 ひらかな 読みすればいつもムラムラしてそうだった。3人が名前を名乗つたので私も

「あたしは、串灘 遥です。」

と名乗ると

「遙…いい名だな。」

とリュークがほめてくれた。名前をほめられるなんて初めてで思わず顔が赤くなつた。それをきずかつてカリュークはあえて何も言わないでいてくれた。

落ち着いたせいか、今までの疑問がわいてきた。

おっさんはなぜ吹つ飛んだか？ 義妹つて？ なぜおっさんが愛理ちゃんを…それはきっと性犯罪者だからだろう。

その問い合わせたのは愛理ちゃんだった。

「えつと、性犯罪者さんがふつとんだのはリュウ兄がけつとばしたからで、義妹というのはそのままの意味です。」

…いや、それはと思つておっさんを見たら はあはあ言いながら白衣の裏に血をにじませていた。さすがに引いた。前から引いてたけどもつと引いた。ふと、愛理ちゃんの言葉を思い出す。《蹴つ飛ばしたからで》案外事実でした。

真実は残酷…（前書き）

今のところ何とか更新できてる…

真実は残酷！！

はあああ…。

今ほど泣きたいときはないだらけ。

この話をすることには、3時間ほどかかるほどの必要がある。

3時間前 そう、それは血を流しながら

「はあ…はあ…」と息を荒げていた40後半のおっさん 歩く性犯罪者（村良 清太郎）が倒れて

「75…62…72…」と数字を言つていた。といつも私のスリーサイズだった…。いつ調べたの…？怖い！怖すぎる…！調べられるタイミング…あつ！ききき、気絶してたときとか…ま、まま、まさかね？まさかないよね…？それ以外に思いつかない…。ゾワ…！…と、悪寒が走った。間違いなくトラウマになつた。これ以上その話題に触れたくない…。

おつと、私としたことが違う話題を話してしまつた。

ああっ！ 今の話だけでも十分泣けるのに…！お母さん私は汚れてしまつたのでしょうか…？これ以上考えるのやめよつ…。

おつさんが倒れてリューケは土葬するか、火葬するかで悩んでいるときに愛理ちゃんがおつさんを部屋から連れ出していく。愛理ちゃん 優しい…！…襄われそうになつたのに…！優しすぎる…。おつさん愛理ちゃんにお礼を言え…！…そして謝れ…そんなことを考えていたらリュークが

「チイイツ…！あの犯罪者め、逃げたか…？」と、びびりながら愛理ちゃんが連れ出したのに気づいていなかつた。横を向くと、ドアの前に愛理ちゃんがいた。どうやら逃がしてあげたようだつた。そういえば、まだ愛理ちゃんをきりんと見ていなかつた。（いろいろあって忘れてた…）（めんより愛理ちゃん）愛理ちゃんは白髪で、田の色は薄い青だ。なにより可愛い、女の私ですら見とれてしまつ

ほどに。待つた、今の発言で私はレズと認識されたら困る。ちゃんと男のがいいです。私はレズではない！ よし、これで大丈夫だろう。愛理ちゃんの話から、レズ否定話をし終えたころリュークが唐突に

「あっ！ そうそう、もう国に戻れないからね、遙ちゃん」と軽く言

われ、軽く思考停止した。

眞実は残酷…（後書き）

感想を書いてもらえたうれしいです。

謹つて此意…！（繪畫也）

今回はこつもよつもないです。すこません。

気がついたらおっさんがはあはあ言って私のベットに入り込もうとしていた。リュークの一言でぶつ飛んでいった思考回路は、おっさんの汚い面がこんなに近くにいるないと気がつかないほど私にとつて驚きだったということだわ。…。

ପାତା ୧୦୮

物理的なものから少し離れたところに置いた。

バン！（黒髪の男の子がドアを開ける音）

デゴー（おひさん&おひちゃんの顔にその男の子の蹴りが炸裂する音）

「…………」てっきりリュークが来るかと思つたので焦つた。何に焦つたつてそりや……リュークみたいなヤツが出てきておっさんの顔を蹴つ飛ばしたことだよ！

その男の子は18歳ぐらいで赤い目をしていた。

「いやー、その、何と言うか…すいませんでしたあーー！」 そう言つと同時に土下座していた。

「え！？ ちょっと！ 何やつてるんですか！？」 とんでもなく焦つた。年下相手に敬語を使つてしまつた。

こんなとこ誰かに見られたら私は、私は…時すでにおそしだつた。
彼女 白炎 愛理ちゃんにそのシーンを見られていた。… ならば！
！我が人生！！

人とは個性的!!（前書き）

感想おまちしております。書いてね

人とは個性的！！

「…何やつてんの？ 龍一くん。」と愛理ちゃんは驚いた様子もなく、淡々と聞いていた。

あれ？ 思つてたより意外と大丈夫？ それとも私は彼女の中で始めからそんなポジションなの？

「あの、遙さん。彼、りゅう兄に丁重に頼むよ なんて言われてたものだから、つい。」

いや、そんなこと言われても…。てゆか、ついつて…。

私の最近思ったこと ここには変人しかいない！！

「ど、とりあえず顔を上げて」とりあえず顔をあげてもらおう。そういえばこの子の名前知らないな、さつき愛理ちゃんが『龍一くん』といつてたけど…。

「君名前なんていつの？」思い立つたらそく行動！それが私だ。
「黒炎 龍一です。よろしくおねがいします、ハルさん。」「ハルさん」と、やつと顔を上げてくれた少年によばれた。慣れなれしないこのヤロウなんて思つていません。断じて思つてません。

まあ、いいや。それよりリューグが言つてた『もう国に帰れないから』のが気になるな。龍一くんに聞こうと、思つたら

「よう！ 放心状態治つたかい！？」と本人であるリューグが飛び出してきた。驚いた。普通に驚いた。だつてベットの下から飛び出してくるんだから…！

「どつからでてきんのよー？」つっこんでしまつた。大声出したから傷口が痛い。悲鳴のときは痛くないのに、なんでだらつ？ そんなことを考えていると

「まあまあ、気にしない、気にしない」と、言つてきた。気にするわー！ でも、今は、リューグの言葉の意味のが知りたいのでよしと

した。

そう言つたリュークの口は、青かつた。あれ？最初から青かつたけ？気になつたので聞いてみた。すると

「いやね、外に遊び言つたときカラー コンタクトしてつたから外すの忘れててさつき外したのよ」遊びつてあんた用兵だろ。

まあ、今そんなのより帰れない理由のが気になるので聞いてみた。

このときはまだ最初の目的を忘れていた。わたしはそのうち気がつくであらう自分がとてつもなく馬鹿であることにして..

探し人はすぐ目の前！！（前書き）

さあ、なんだかんだいって毎日更新中！がんばっていきます。

探し人はすぐ目の前！！

「いやね、うちはれでも非合法なんだよ。」 そんなさうじと言われても…

「俺ら国家クラスの揉め事処理やてつたりするのよ」軽く言わないでほしい。というか国家クラスですかい！！ 私そんなすごいところにいるんすか！？ でも待つてどんな揉め事を？ もしかしたらかなりやさしいことだつたり

「例えば、テロ犯を締め上げたりするんだよ」夢が消えた…

「用兵つてそんなことしましたっけ？」疑問なんで聞いてみた。（

あとから思ひと私適応卑…！）

リュークはベッドの下から出て来る気配から起き上がりつ

「あんまりうちの存在知られると厄介なんだよ」と真面目な顔で言
い出した。

「うちは生きていいくために金さえもらえりやある程度のことはする。これでも、こんなんでも、天空を支える1人の王だからね。それに、ここは俺がつくった居場所なんだ。ここがすべてと言うやつも少なからずいる。まあ、500人ぐらしかいないんだけどね。」王?
なんか引っかかる。何でだろう? そんなことを考えて出してたら

「どうでよ、なんあんなバカにつつかまつてたんだい？」

下手したら人違いかも。恐る恐る聞いてみた。

ねえ、40年前の大戦に出てた?」すると

「うおー！？」リュークが驚いてた。いや、まあ、いきなり声上げたからからかな…。

そして、私は悟った。私はとてつもないバカだ！！！

追憶とは恋しきもの……（前書き）

日々努力してポイントをつけていただけぬよつがんばります

追憶とは悲しきもの…！

「リューカつて何歳？」

ふと疑問がわいた。だつて婆はどう見ても二十歳前半なん。

64 たよひ

64歳つてジジイじやんー！

驚いてるね。まあ、無理なしが、俺不老なのよ。

………

（三）本邦の古文書の現状と問題

くるまで、死ねないようになつてゐるんだよ。まあ、正確には不老半不死なのよ。だから心臓や脳をやられりや死ぬんだよ

「ねえ、私は仕事を依頼するためにななたをさがしてなの」と本題に入ることにした。

一
し
し
せ
い
ト

実は...え？」

軽くぐぐられた。何を語りでなしの間にあいしゃせんが、突然、

卷之三

五百三

「えつと北之江町きたのえぢょうという田舎で大量虐殺があつたの知つてますか

?

まあ、結構有名だからね。」

「その犯人を殺してください!」

追憶・串灘家

私の家族は私を含む4人家族

弟、私、父、

普通のどこにでもある家族

北之江町に住んでいた

私は大学に行くため東京に行つっていた

去年、事件はおきた

去年の7月10日22時にそれは、大量虐

殺はおきた

北之江町にいたすべての

人間は死んだ

たあとがあつたらしい

私は一夜にして家族を失つた

鎌で切られ

壇しみ黒丸塊ーー（前書き）

ねれせー毎日更新のもじがんばっておつまむ。

憎しみは黒き塊！！

「なるほどね。ようするに家族の敵討ちしたいと…」「お願いします」

頭を下げてお願いした

「いや、だから受けたから、その依頼。それに、その犯人を俺は知つてるしね」

「！？」驚きを隠せなかつた。一体誰が！？それが、それしか頭になくなつた。

「誰なんですかそいつは！？」

次の瞬間には傷の痛みを無視してリューコの首元に飛び掛つていった。そして、リューコは私の疑問にいつものように

「俺の5人の弟子のうちの一人だよ」

と軽く言つた。私は言葉を失つた。その後に
「まあ、途中でいなくなつたんだけどね」
と続けた。

「わかり…ました。」

今こんなことを話してもしようがない。私がリューコから手を離すと
「先に言つとくけど金は今回いらないから」「へ？」

意外な、意外すぎる言葉がリューコが言つた。

「今回は俺の弟子が起こしたことだから、師匠がケリつけない」とい
けないからね」

あれだけ「金」と言つたから今回、金を取るかと思つた。

「あ、遙ちゃん、ちゃんと君も現場に行くんだよ」

「！？ 本気ですか！？ 私足手まといになりますよ…！」

焦つたけど、また軽く言われたから冗談かと思つたら

「本気だよ。君も来るんだ、遙ちゃん。そして見届けるんだ、君の
家族を殺したやつの シンヤいや、『深淵の王』アビスの最期をね。

「私の家族を殺したやつの名を言つたりュークは残酷にも、無邪気にも、笑つてゐるよ
うに見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2782m/>

Rising stars

2010年10月16日13時47分発行